

第2回 国際園芸博覧会日本国出展委員会 意見の概要

【2022年アルメーレ国際園芸博覧会に向けた準備状況について】

- 2027 横浜国際園芸博覧会に繋げていけるような取組にすることや、地球環境時代ということを中心に、里地里山にある「暮らしの庭」、「生産の庭」、「実用の庭」という新たな切り口で取り組み、素材や行事等に工夫を凝らすということに重きを置きたい。里地里山では、四季折々の伝統行事と緑豊かな環境というものが表裏一体で展開されている。素材として竹を活用することが考えられるが、竹には珍しい種類があるため、こうしたものを活用して関心を呼ぶような仕掛けができると良い。
- 桜のコンテナ展示は、四季を感じる新たな試み、新たな技術として実施できると良い。
- 北京国際園芸博覧会では国土交通省と農林水産省が一体となって出展したことで非常にうまくいったため、今回も一体的な出展をお願いしたい。
- アルメーレでは、横浜に繋がるということで里山をテーマに挙げているが、里山というと自然の花、野生の花というイメージになってしまい、日本の中で進められている園芸、花きという文化をうまく取り入れられるかという懸念が若干ある。
- 北京国際園芸博覧会では、国内での PR が少なかった。国内を盛り上げる情報発信ができれば横浜国際園芸博覧会に繋げることができる。
- 北京国際園芸博覧会では様々なシンポジウム、現地との意見交換会の機会があり好評だったため、アルメーレでも現地との文化の交流や情報交換の場を作ってほしい。特にオランダの施設園芸は日本が見習う点がある。
- 花については、オランダは MPS という認証制度を前から行っているが、今回の出展については MPS を取っているということが輸入輸出の大きな障害になるかもしれない。MPS を取っていないものを日本から送り込むということが非常に困難になる可能性があり、懸念に感じている方が多い。これに向けての準備が必要。
- 里山は心静かに見る、息を飲むような美しさといったことは表現しやすいが、わくわく感の演出が難しいと感じる。子供たちや若い人たちにたくさん来てもらいたいので、楽しい、わくわく感というものを室内展示でどのように表現するかということを検討してもらいたい。見た方が驚くような演出を検討してほしい。
- オランダだけでなく、EU では例えば、CO2 の排出量の表示がなければ市場で取引しないという状況になっている。環境認証に対してはかなり厳しく見て

いく必要があるのではないか。出展事業者に対して、こうした対応への支援の在り方についても検討してほしい。

- コロナ禍の状況に鑑み、現地の人のネットワークをどのように出展に活かしていくのかを検討する必要があるのではないか。
- 植物検疫に関して事務局から情報はるか（出展に向けて支障が生じないよう進めていく旨、事務局より説明）。
- 国際園芸博覧会では日本にしかない品種等を PR する絶好の好機と考えている。こうした PR を通じ、横浜国際園芸博覧会にも行ってみたいという機運の醸成に繋がると良い。
- 川口市はこれまでもフロリアードに参画しており、今回は植物材料の提供を行うとされているが、四季折々の素晴らしいもの、これから発展するような植物をいろいろ組み合わせるアピールをしていただきたい。
- 日本国出展の場で取引のきっかけとなる商談の場のようなものが設けられると良い。
- モノづくりが先に来て、どのようなイベントをするのかということがどうしても後回しになってしまう。どのようなイベントを行うのか、この里山の庭園で何を見せ、何を PR するのがまだ見えてこない。行催事計画を踏まえて詳細設計を進めてほしい。
- 今回のアルメーレは、北京国際園芸博覧会に比べて出展面積が小さい。その中で北京国際園芸博覧会よりも多くの日本的な要素を様々な形で表現しようとして検討されているが、色々なものをどのように印象的にデザインしていくのかは相当な工夫が必要。そのため、横浜国際園芸博覧会のテーマそのものを印象づける等、様々な演出も含めてこれから議論が必要。里山イニシアチブの発信にも繋げてほしい。
- 今回の計画は非常に未来的という印象を受けた。建築物がバイオフィリックとあるが、欧州では、「バウビオロギー（生態環境建築）」が流行っている。言わば日本の民家に学んだようなものであり、いかに自然と共生し、再生循環をするのかという考え。そのような建築があるべきだということで、近代の建築技術にも取り入れられている。ドイツではこのバウビオロギー専門の大学もあり、こうした建築のプレゼンテーション、考え方は欧州に好感が持たれる。
- 茅葺の建築はコストが掛かるため、コスト面の検証をしっかりと行った方がよい。
- 里山というのは未来的なテーマであるが、漢字で「里山」と表現するのかローマ字で「SATOYAMA」と表現するのは非常に重要。COP10の「SATOYAMA イニシアチブ」はローマ字であるが、日本にある里山のように自然と人の関わ

り方を調整する機能をもっと見直すべきだという考え方でローマ字にしたもの。今でいうグリーンインフラの考え方。途上国でもコストをかけずに生物多様性に貢献できると受け入れられ、COP10の成功の要因の一つとなっている。

- 横浜とのシームレスの関係についても忘れてはならない。オランダのライデン博物館にはシーボルトの事績が具に展示されている。ヨーロッパの品種改良は日本の原種がなければそこまで進まなかったという事実がある。この事実をしっかりと訴えることが重要。これが横浜国際園芸博覧会に繋がっていくかもしれない。江戸時代後期において、日本はプラントハンティングの宝庫であり、外国が日本に関心を持っていた要因でもある。日本がヨーロッパの園芸界に寄与したことを発信できると良い。
- 元禄年間に開拓された埼玉県の新田（さんとめ）新田では、短冊形の新田開発が行われた。そこでは周辺にある里山の雑木林から落ち葉を集めて堆肥化し、畑を耕すことで、非常に人気となった「紅赤」というさつまいもを作り上げた。農家の庭の周りでは農家建築、薬剤、お茶、その他暮らしに役立つ嗜好品すべてがそこで生産され、短冊形の中がミクロコスモスとなり、循環型の暮らしを営む空間が形成されていた。このような考え方が日本には昔からあり、里山というのは景色や一面的な雑木林ではなく、暮らしを支える基盤であったということも、欧州で進んでいるポストコロナにおけるグリーンリカバリーという考え方と軌を一にするのではないか。そのような思想も表現できれば、横浜国際園芸博覧会への期待が高まっていくのではないか。
- わくわく感も大切であり、日本の祭事、いわゆる七十二候という季節ごとの様々な祭事を強調して出すことによって、表現することができないか。
- 伝統の価値が未来の再生循環・自然共生の思想に合致しているというプレゼンテーションができるようなやり方があると良い。

以上